

# 『民芸運動とキリスト教』 －機織る伝道者外村吉之介－



神学部教授 神田 健次

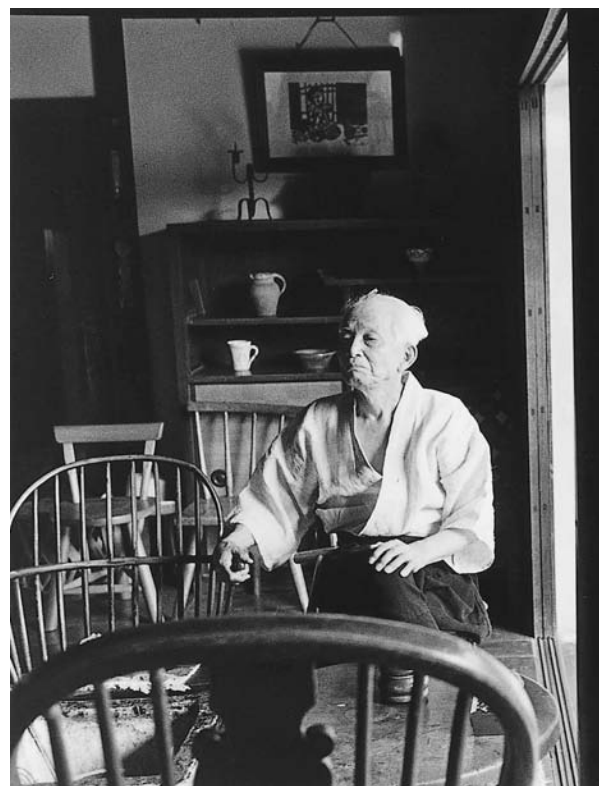
## はじめに

柳宗悦を基軸とする日本民芸運動は、戦前・戦後を通じて平和を志向する文化運動として、今日、多方面で再評価が行われてきている。戦前、日本メソヂスト教会の牧師として民芸運動に参加し、戦後は倉敷民芸館の館長として国内外における民芸運動の進展に大きな貢献を果たした外村吉之介は、本学神学部で学んだ同窓である。本稿は、そのような機織る伝道者外村吉之介の歩みと働きを紹介しつつ、その思想にも言及し、大学図書館所蔵の外村吉之介の著書に親しんでもらうことを意図としている<sup>(1)</sup>。

## 【1】献身への道

1898年9月27日、外村吉之介は、滋賀県で生まれている。学校を卒業（旧竜田商業）後、仙台と大阪の商店で勤務しているが、大阪で働いている時、内面的な問題もあって日本メソヂスト大阪両国橋教会（現在の東梅田教会の歴史的ルーツの一つ）に通うようになる。当時釘宮辰生牧師が牧会していたその両国橋教会において、外村が23才の1921年の秋、洗礼を受けている。さらに翌年、勤務の都合もあって神戸に移ったのを機に、日野原善輔牧師の牧する神戸中央教会（現在の神戸栄光教会）に転入会し、そして伝道者への献身の思いを与えられ、関西学院神学部に入學したのが23年の春であった。

神学部での在学期間、外村の関心は、日本の文学や芸術に強く惹かれていた様子が、「在学中芸術への愛が湧き、国文学に心をひかれたが、殊に万葉集やアララギ派の作家達に傾倒し、一方又古美術や仏像に心を寄せ、京都や奈良の寺々を殆んど残りなく巡礼した」という回顧に窺える<sup>(2)</sup>。1926年3月、外村は神学部を卒業



外村吉之介

しているが、伝道者への献身の思いが十分ではないと判断し、京都基督教青年会（YMCA）の宗教部主事として、新たな歩みを始めている。YMCAの働きの中で、土曜学校の実施や京都基督教青年会神学校の開設などは、外村の働きとして特徴的なものと言えるであろう<sup>(3)</sup>。

京都YMCAの時代、外村にとって生涯を決定するような大きな出会いを経験することになるが、その出会いについて、外村は、『民芸遍歴』の「あとがき」の中で、次のように叙述している。「晩学であった私は、近世思想のめざめもおそく、大正の中ごろようやく個性の発見に喜び勇み、マックス・スチルネルの『自我経』に興奮して、自我が人生一切の中心だと信じて動いていたのである。しかし、個人主義の誰もが経験したように、個我の力量の限界を感じ出すと、身辺が崩れて絶望の淵が迫ってくる思いを避けることは出来な

かった。……そういう時に、私はカール・バルトの危機の神学と、柳師の『工芸の道』に触れた。前者は雷のように強く私を撃ったが、後者は慈雨のように優しく私を包んだ。それらはともに、近世の浪漫主義に対する激しい批判であり、甘い自己陶醉を打破る警鐘であった。私は回心した。ことに、柳師の工芸の道によって、私は真の地上の道を見出し、突如として古代や中世へ、わが家へ帰るように帰った」<sup>(4)</sup>。

ここで、「マックス・スティルネルの『自我経』」と言われているのは、19世紀前半に活躍したドイツの哲学者マックス・スティルナー（Max Stirner；1806-56）の代表的な著書“*Der Einzige und sein Eigentum*” 1845. を指している。通常、『唯一者とその所有』と訳されるが、外村が手にしたのは大正10年に辻潤によって『自我経』と翻訳されたもので、スティルナーはこの著書で、ヘーゲル左派の思想から出発し、神や教会や国家などの権威を否定する極端なエゴイズムを主張している。このような個人主義を謳歌するスティルナーの思想に魅了されながらも、しかしながら他面、その行き着くところ、「身辺が崩れて絶望の淵が迫ってくる思い」に苛まれた苦悩を、外村自身告白している。その苦悩の直中、天啓の如く与えられた二つの決定的な出会いがあったと語られ、一つは「カール・バルトの危機の神学」であり、他は「柳師の『工芸の道』」にほかならない。

カール・バルトは、20世紀を代表する神学者で、1919年の『ロマ書』において、人間の側から神に接近しようとする近代神学の試みを根本的に否定し、神と人間との質的断絶を主張した。絶対的他者としての神が、有限の人間にどのように危機的に関わるのか、その逆説的な関係を弁証法をもって解明しようとしたことから、「危機の神学」あるいは「弁証法神学」とも呼ばれている。このバルトの思想の衝撃に出会い、外村は浪漫主義的な「甘い自己陶醉」が打ち砕かれ、「栄光唯神に在れ」とする回心を経験したのである。

バルト神学との出会いが「雷のように強く私を撃った」のに対して、もう一つの柳宗悦著『工芸の道』<sup>(5)</sup>との出会いは、「慈雨のように優しく私を包んだ」と語られている。柳の『工芸の道』は、彼の民芸理論の中でも最も基礎的で、重要なものであり、キリスト教神秘主義に基づく宗教哲学的考察をその背景にすえている著作である。カール・バルトの神学とあわせて、こ

の柳宗悦の『工芸の道』との決定的な出会いによって、外村は新たな生きる道を指し示されたのである。

## 【2】機織る伝道者

1929年4月、外村吉之介が最初に赴任した教会は、日本メソヂスト山口教会であった。山口教会時代には、いくつかの点で積極的な民芸運動への関わりを模索している状況について窺い知ることができる。まず最初に、新たに創刊した教会報『高き櫓』において、宗教と民芸に関する柳宗悦の文章を掲載したり、柳宗悦や河井寛次郎、あるいはキリスト者で民芸運動に関わっている湯浅八郎や村岡景夫などと積極的に交遊している記録を掲載していることがあげられる<sup>(6)</sup>。また山口で菱川精一が編集刊行している『福音と思想』という月刊誌に、意欲的に随想を寄稿し、殊に仏教とキリスト教の鐘を比較して考察した「鐘について」、柳宗悦の『工芸の道』を中心に民芸の思想とキリスト教について論じた「美について—一つの懺悔録」などは、この時期の外村の思想を知るうえで貴重である<sup>(7)</sup>。

さらに、教会の聖餐台や献金台用の小卓と花瓶台の図案と監督を柳に依頼して作成していることがあげられる。教会報『高き櫓』で、「聖案と花瓶台 聖案は朝拝の献金台、夕拝の講壇、聖餐式の聖餐台、洗礼式の洗礼盤台として用ふるもの 図案及監督 柳宗悦氏制作 鳥取市にて 右二個を聖堂に献げたし」と、献



聖餐台 図案及監督 柳宗悦

金が呼びかけられている<sup>(8)</sup>。現在でも教会で大切に使用されている柳宗悦の図案による小卓と花瓶台は、プロテスタント教会で教会建築に関する関心が乏しかった時代の作品として注目すべきであろう。

このような民芸運動との積極的な関わりを模索する中で、外村は、具体的な工芸の世界に携わりたい思いを膨らませ、陶工の道を希望して柳に相談するが、年齢的に難しいこともあり、むしろ織物の世界を始めるよう助言を受ける。しかも浜松の近くで織物を指導する平松実を柳から紹介される<sup>(9)</sup>。外村が山口教会を辞し、1932年4月に日本メソヂスト笠井講義所に赴任した背景には、このような外村自身の民芸運動への抑えがたい思いがあったのである。浜名郡積志村西ヶ崎に教会と土蔵を改装した仕事場をもち、宗教と工芸の接点として農村への伝道を担うということは、外村にとってかねてからの夢の実現であった。柳宗悦より甥にあたる柳悦孝の精神面も含めた指導を託され、彼らは毎日浜松の平松家へ通って織りの手ほどきをうけたが、近所にも機織りの経験者がいた。この地方は古来遠州縞という木綿の普段着を何百万反と織り出しつづけた土地であったのである。なお、1933年秋、京都の大毎会館で芹沢銈介、柳悦孝、外村吉之介の三人の染織新作展が催され、そして34年には外村は国画会工芸部会員に推薦されている。

1934年、外村はさらに日本メソヂスト袋井講義所（後に教会）に赴任している。笠井講義所と同じ静岡部で、この年牧師としての按手礼を受けている。外村は、日本メソヂスト袋井教会の牧師としては1941年まで、そして41年の日本基督教団の成立にともない、日本基督教団袋井教会としてはほぼ終戦まで、計11年間教会の責任を担っている。

袋井に移ってから教会の牧師として伝道・牧会に携わりつつ、新たな民芸運動への関わりを一層深く探ってゆく。教会堂の側に二間×五間の仕事場を柳からの援助をうけて建て、そこで本格的な織物に着手し、この袋井教会工房でも習う人が増え、その指導にも追われることになる。織物作家としての外村にとって、この袋井で最も重要な展開は、すぐ隣の掛川における葛布との出会いによってもたらされた。葛布については、文書として吾妻鑑や平家物語等に多く見出されるもので、江戸の元禄時代にはその流行を極め、民家の

暖簾や座布団地に、夜具地や夏の襦袢にも広く用いられた。明治時代以降、次第に衰退の運命をたどることになるが、外村によって再興されることになる。

1936年10月24日 日本民芸館創立開館記念「第一回新作工芸展」に河井寛次郎、浜田庄司、富本憲吉、芹沢銈介、川上澄生、棟方志功、柳悦孝ら同人と共に出品し、以降、毎年続く。また43年2-3月日本民芸館で「外村染織展」が開催される。彼も壁布を試み、36年秋開館の日本民芸館の大広間の壁面を引受けて織り、そして雑誌『工芸』の四十九号から六十号の表紙も引受けている。38年には、古作品に倣う無地物、縞物百三点を貼布し、本文をつけた『葛布帖』<sup>(10)</sup>が日本民芸協会から出版された。この記念すべき外村の作品集『葛布帖』に対して柳は、「こんなにも一人で多種の色や柄を生み出した葛布の織手は、昔にもなかったのではあるまいか」と、大変高い評価を与えている<sup>(11)</sup>。

### 【3】倉敷民芸館を拠点として

戦後の外村吉之介の新たな出発は、倉敷から始まっている。戦禍から逃れて福井県大野に移っていた外村を、柳は倉敷の大原総一郎に推薦し、外村は家族と共に1946年に倉敷に移住している。倉敷における外村の働きの第一歩は、同年に大原を会長として、岡山県民芸協会創立に尽力し、二年後の48年には倉敷民芸館を設立して館長に就任したところから始まっている。この民芸館は、東京駒場の日本民芸館に次ぐ第二の民芸運動の拠点となるものであった。

また53年には、倉敷民芸館付属工芸研究所（後に倉敷本染手織研究所と改称）を自宅に創設し、夫人と共に民芸美論と本染手織り技術を指導し、工人育成に努めている。40年以上続けられた工芸研究所から、230名を超す職物の指導者を全国各地に送り続けてきた外村の地道な働きは、民芸運動推進の一つのモデル的あり方として高く評価されている。研究所における共同生活では、実際に職工としての専門的な技術指導のみならず、柳の民芸理論の講義も行なわれ、折々に聖書の話も語られている<sup>(12)</sup>。そこには、P. ティリッヒの言う「潜在的な教会」と呼ぶことのできる共同体の姿を見ることができであろう。

1957年秋には、外村は沖縄全島を50日間旅行し、沖





倉敷民芸館

倉敷民芸館付属工芸研究所  
(後に倉敷本染手織研究所と改称)

縄民芸の調査、指導、蒐集に努力している。外村にとって、沖縄の民芸は特別な意義をもっているが、その最初の出会いは、1939年3月、柳宗悦をはじめ日本民芸協会の同人と共に沖縄を訪問し、約二ヶ月間滞在したことに遡る。その滞在において、沖縄の工芸に学び、その保存と発展の助力をするために、柳宗悦が全体を統率し、陶工の浜田庄司と河井寛次郎は壺屋の窯場で、染工の芹沢銈介と岡村吉右衛門は首里の瀬名波や那覇の知念染場で、織工の外村吉之介と柳悦孝は首里内外の織女たちの許に、田中俊雄は図書館に通って、それぞれ調査と研鑽に励んでいる。外村自身が、沖縄滞在中を通して何を考え何を学んだかについては、その執筆担当した「日本民芸協会同人 琉球日記」、『工芸』の琉球特集における「琉球の民芸」、「琉球の織物について」、また『月刊民芸』の琉球特集における「琉球の近道」、「琉球の芝居」、「久米島だより」、「琉球の友へ」などの随想で窺い知ることができる<sup>(13)</sup>。

さらに1965年には、熊本国際民芸館の創設に関わり館長に就任し、また同年、東予民芸館（現、愛媛民芸館）創立に、そして74年には出雲民芸館の創立に協力し、国内における民芸運動の新たな展開に尽力している。国内だけではなく、国際的な民芸運動の発展に貢献したことも記憶されなければならないが、まず1959年の10月より半年間、北米と欧州の14ヶ国を訪問、西洋民芸品多数を初めて日本にもたらしている。続いて66年、72年、77年の三回欧米に渡り、工芸文化の国際

交流に寄与し、また、68年には世界工芸会議第三回大会（ペルー・リマ市）に日本代表として出席して、「日本の民芸」について講演している。さらに74年には、韓国を訪問し、韓国民芸協会の成立に関わり、84年には、インドの民芸の調査、蒐集に当たっているのである。

戦後の民芸運動の推進のために、文字通り指導的な役割を果たしてきたと言えるが、わけても外村の独創的な運動の展開方法は、日本民芸夏期学校の創設と少年民芸館の推進に顕著に窺える。1973年8月に、新たに若い世代の自覚と努力を求める契機に「日本民芸青年夏期学校」（後に「日本民芸夏期学校」に改称）が創設されて以降、毎年夏、全国四会場で日本民芸協会の最大の年中行事として実施されてきている。工芸の教育への外村の貢献としてもう一つあげられるのが、84年に『少年民芸館』が刊行<sup>(14)</sup>されたことである。民芸運動の度々の危機に直面して、民芸本来の真意を若い世代には夏期学校という形で、子どもたちには少年民芸館という形で提示しようとした中に、伝道者としての外村の賜物がいかんなく発揮されていると言えるであろう。

#### 【4】美と信の使徒として

民芸における「美」とキリスト教における「信」との両者を内的に統合して捉える外村の理解は、柳の

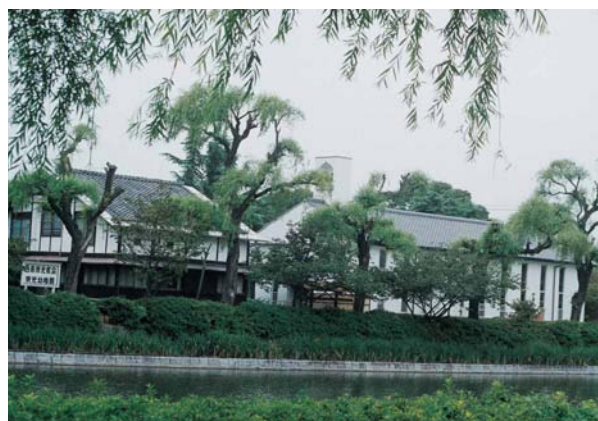
『工芸の道』に由来するものであるが、既述のように袋井教会の初期の時代には、この両者の関係について、「私にとって伝道することと機を職することとは二つではありません。信仰の暮らしと工芸の働きとは神の御働きかけの中にあって、一如であります」<sup>(15)</sup>と、表現されている。換言すれば、外村にとって、伝道・牧会のために牧師として働くことと、機を職する職工としての働きは、双方とも「神の御働き」、今日的に言えば、「神の宣教 missio Dei」に共に参与することに他ならない。

ところで、民芸が、いわゆる近世の美術と基本的に一線を画す点は、美術が鑑賞される美であるのに対して、民芸は用いられて輝く美、即ち「用美」であることであった。「基督教芸術に関する音信」の中で、外村は、この「用美」という民芸の基準に即して、礼拝に仕える芸術の復権について語っている。そこには、ヨーロッパ中世における卓越した芸術が、ことごとく神の栄光を表す教会堂とそこにおける礼拝に共同で仕えるという、宗教芸術の理想像を反映しているのである。この点は、『我思ふ』好みや自由に走る者なく、皆共に神に帰し、神を拝む暮し仲間として畏れ喜ぶ仕事を励んだ。個人の力は協団に帰納せられてこそ処を得、真価を発したのである。それ故この時代の何れのものにも作者の銘を見出すことは出来ない。記念すべきものは人の名ではなくして、神の聖名であった」と、語られる<sup>(16)</sup>。

さらに民芸と基督教との関係をめぐる外村の貢献として、教会建築をあげることができるであろう。既に、最初の教会の任地である山口教会時代から教会の工芸と建築への関心は芽生えており、礼拝に仕える献金や花瓶を置く小卓の設計を柳に依頼し、現在でも教会で使用されている。また、外村は、十字架のデザインによる屏風や布の製作にも着手しており、彼自身の葬儀の際にも用いられている。外村が教会建築の設計に関わった例として、日本基督教団西条栄光教会と民芸風の牧師館の設計があげられるが、それは今日も地域の人々にも愛され親しまれている教会建築である。さらに1963年の夏、京都の日本聖公会の聖ヨハネ教会が取り壊しの危機に直面し、その知らせを耳にした外村が、取り壊しを阻止するために河井寛次郎と共に行動を起こし、教会は明治村に国の重要文化財として指



十字架のデザインによる屏風（葛布織）



日本基督教団西条栄光教会

定・保存されることになった事例も看過できないであろう。

最後に、外村における民芸と基督教との関係で、言及しなければならないのは、外村の生涯と働き全体の根底を貫流するモットー「木綿往生」についてである。1992年、外村は岡山県文化賞を受賞しているが、その記念講演「愛の三つの相について」の中で、この生涯のモットーについて次のように語っている。「私の考えでは、人類に与えられている繊維の中で木綿は最高の存在だと思います。最も有用であります。生まれてから死ぬまで、私共は木綿の厄介になっています。……私共の倉敷本染手織研究所では、その仕事のモットーとして『木綿往生』というのを掲げております。木綿は今申したように、様々なお役に立った後は雑巾になって一生を終わります。雑巾になりますと、バケツ中で揉まれ絞られて、板の間や廊下を拭き家具類を拭きます。そしてボロになって生命を終わります。……そういう往生をしようと言うのが私共の願いであります。世に役立つようと、アガベこそ、木綿から教えられる私共の仕事でございます」<sup>(17)</sup>。





明治村の聖ヨハネ教会



「愛の三つの相について」  
とは、ギリシャ語のエロース、  
フィリア、アガペーのことで  
あるが、「木綿」に象徴される  
愛の相とは、聖書におけるア  
ガペー、神の愛にはかならな  
い。その愛は、外村が最も愛  
読していた旧約のイザヤ書53  
章4-5節では、「彼が担ったの  
はわたしたちの病、彼が負った  
のはわたしたちの痛みであつ  
たのに、わたしたちは思っ  
ていた、神の手にかかり、打た  
れたから彼は苦しんでいるの  
だ、と。彼が刺し貫かれたの  
は、わたしたちの背きのため  
であり、彼が打ち砕かれたの  
は、わたしたちの咎のためで  
あった。彼の受けた懲らしめ  
によって、わたしたちに平和  
が与えられ、彼の受けた傷に  
よって、わたしたちはいやさ  
れた」と、表現され、新約の  
イエス・キリストの生涯が指  
示されている。「木綿往生」を  
指標として生きる外村吉之介

の生き方とは、旧約において苦難の僕として預言され  
たイエスに従って生きる歩みに他ならず、そこに「美  
と信の使徒」外村の真髓を窺うことができるのである。

# < 註 >

- (1) 外村吉之介の詳細な働きと思想については、拙稿「機織る伝道者—外村吉之介論」(『神学研究』第48号、2000年)、同「知られざる学院史の一齣—民芸運動との関わりをめぐって」(『関西学院史紀要』第七号、2001年)を参照。
- (2) 「美について—一つの懺悔録」(『福音と思想』四月号、第一巻第六号、山口福音と思想社、1930年、16頁)
- (3) 『京都YMCA七十年史』(京都キリスト教青年会 1975年、157-158頁)
- (4) 『柳宗悦全集』第八巻(筑摩書房 1980年)。なお、柳宗悦の『工芸の道』をめぐっては、拙稿「初期柳宗悦における宗教論と民芸論」(『基督教論集』2001年3月)を参照。
- (5) 外村吉之介「あとがき」(『民芸通歴』1969年 朝日新聞社 299-300頁)
- (6) 『高き槽』(日本メソヂスト山口教会月報、1930年9月、1932年1月)を参照。
- (7) 外村吉之介「美について—一つの懺悔録」(『福音と思想』4-5月号)
- (8) 『高き槽』(1931年12月)。実際に、柳が図案を作成し、鳥取の吉田璋也を通して注文した経緯は、柳からの書簡(1931年10月28日、11月7日、28日)からも窺える(『柳宗悦全集』21巻上 455-457頁)。
- (9) 1931年6月24日の柳からの手紙を参照(『柳宗悦全集』21巻上 431-432頁)。
- (10) 外村吉之介『葛布帖』(日本民芸協会 1938年)
- (11) 柳宗悦「外村吉之介著『葛布帖』跋文」(柳宗悦『私の念願』不二書房、1942年 308頁)
- (12) 外村吉之介「風雪—丹青万」(『続・民芸通歴』朝日新聞社、1974年、105頁)
- (13) 日本民芸協会同人の沖縄滞在とその成果については、柳宗悦「沖縄の富」(『柳宗悦全集』第15巻)、式場隆三郎編『琉球の文化』(格樹社 1941年、復刻1995年)、『工芸』：第99号(琉球特集)1939年10月、第100号(琉球特集)1940年10月、第103号(琉球特集)1940年10月；『月刊民芸』：第8号(琉球特集)1939年11月、第12号(琉球特集)1940年3月を参照。
- (14) 外村吉之介『少年民芸館』(用美社 1984年)
- (15) 小冊子『信仰と工芸』(袋井時代の初期、大月一清編『外村吉之介年譜』「民芸」追悼号)
- (16) 外村吉之介「基督教芸術に関する音信」(『工芸』109号、1941年9月、79-80頁)
- (17) 外村吉之介「愛の三つの相について」(『山陽民芸』1992年)

## 神田 健次 (かんだ けんじ)

1948年新潟県に生まれる。1973年青山学院大学文学部神学科卒業。1980年、関西学院大学神学研究科博士課程修了。1980-82年、ミュンヘン大学神学部留学。1995年、ベルン大学神学部客員研究員。博士(神学)。現在、関西学院大学神学部長。日本基督教団正教師。世界教会協議会(WCC)信仰職制委員(2006年まで15年間)。日本キリスト教協議会宗教研究所理事。日本キリスト教学会理事。著書に『現代の聖餐論：エキュメニカル運動の軌跡から』(日本基督教団出版局 1997年)、『総説実践神学Ⅰ、Ⅱ』(共編著、日本基督教団出版局1989、1993年)、『講座現代キリスト教倫理Ⅰ生と死』(編著 日本基督教団出版局1999年)、『Faith and Order at the Crossroads』, WCC-Geneva 2005 (共著)、『講座日本のキリスト教芸術Ⅱ美術・建築』(編著 日本基督教団出版局、2006年)他。